



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第一〇三号）

しゅんぶん  
春分

三月二一日



## 氷田

そろそろ田んぼで作業をする人々の姿が見られるようになりました。春耕の季節ですが、今回は、田んぼといっても、氷田。氷を作る田んぼの話です。

今でこそ、氷は冷蔵庫の普及で家庭でも簡単に手に入るようになりましたが、冷凍技術が発達していなかった昔は、もっぱら天然氷に頼るしかありませんでした。天然氷は冬に氷池から切り出して、氷室という保存庫にしまい、暑い夏に涼をとるといって貴重品。徳川時代は江戸へも氷が運ばれ、「お氷さまのお通り」とそれはそれはうやうやしい扱いだったといわれています。

内宮前の中村町にあるという氷田は、おはらい町通りの方に案内してもらいました。明治三〇年代生まれの父親から聞いたといわれています。新橋から五十鈴川を一キロほど下った右岸にある浄化センターの裏手の山。菩提山神宮寺跡の看板から入り、雑木の山の斜面をひたすら登ります。途中で伊勢志摩スカイラインを越えて、谷川沿いを登ると、石垣積みの広い田んぼ跡がありました。

さらに登ると、今度は小振りの棚田が、段々と十五、六枚連なっており、幅二メートル、長さは一〇メートルほど、細長いプールのようです。斜面にしっかりと石垣が積まれ、まとまった氷の需要があったようです。「ここはちょうど影になるので、谷水を引いて氷を作ったのでしょうか。

その氷はおそらく、花街であった古市に運んだのでは」と古老はおっしゃいます。標高一八〇メートルほどの氷田からは、賑やかだった古市のあたりも一望できます。ここから氷を切り出し、運ぶのは相当な重労働だったに違いありません。

氷田には氷は張っておらず、水がわずかに溜まっていました。

文 千種清美